

人工乳房手術に保険適用

紀和病院、県内で初認定

乳がん患者が乳房を切除した後、シリコン製の人工乳房を使った乳房再建に一部の病院で公的医療保険を使えるようになったのを受け、橋本市岸上の紀和病院は今年、保険適用に必要な施設認定を受けた。県内病院では初の認定で、自己負担で100万円以上かかっていた費用が、3割の窓口負担に軽減される。

100万円超→3割負担

乳房再建は従来、腹部や背中の脂肪や皮膚などを移植する「自家組織移植」しか保険が使えなかった。病巣以外にメスを入れるため、患者の肉体的・精神的負担も大きかった。一方、

乳がん手術と人工乳房による再建を同時に進めると、混合診療が認められていたため、乳がん自体の摘出手術や検査などの費用も全額自己負担だった。

7月から新たに保険適用



公的医療保険が使えるようになった人工乳房、拡張器を持つ梅村定司・紀和ブレスト(乳腺)センター長＝橋本市岸上の紀和病院

された乳房再建は、がんの切除後、皮膚の下に拡張器を入れ、約半年かけて生理食塩水を増やして周囲の皮膚を膨らませ、人工乳房と入れ替える。現在は米系医薬品会社アラガン・シヤパン(東京都)の円形だけが適用対象だが、今後、日本人女性の体形に合う「しずく型」への適用も期待されている。

紀和病院は、2009年に乳腺専門の「紀和ブレスト(乳腺)センター」を開設。12年には1年間で44人の乳がん手術を手がけた。そのうち乳房の全摘出患者は21人おり、7人が自家組織による再建手術を受けたという。

保険の適用が決まっから、同病院では医師が研修を受講するなど基準をクリアするための準備を進め、今年11日に近畿厚生局から認可を受けた。高額療養費制度もあり、患者の金銭的負担はこれまでより大きく改善されるという。

紀和ブレストセンターの梅村定司センター長(47)によると、乳房を再建した女性からは「補正下着を着けなくてもいい」「子どもとお風呂に入れるようになった」という声が多いという。梅村さんは「乳房を失った女性が再建に踏み切れなかった要因が一つ減り、医療機関側も患者に選択肢を提示できる。女性患者の身体的・精神的な苦痛を和らげることができる」と話している。(中田和宏)